




本でつながるブックリレー






<p>Day1</p>	<p><u>「デート DV (ドメスティック・バイオレンス) 愛か暴力か、見抜く力があなたを救う」</u></p> <p>遠藤智子編著 (ベストセラーズ/2007.11)</p>	<p>結婚や事実婚をしていない交際中のカップル間に起こる暴力がデートDVです。愛し合っているならこんなことは当たり前と、相手からの暴力や束縛を受け入れてしまうなど、カップルのいろいろな事例を引きながら、暴力はどんな場合でも NG で、愛されているからだとは勘違いしないようにすることが大事と説きます。発行から 13 年を経てもなお重要な、デート DV 防止のための指南書。</p>
<p>Day2</p>	<p><u>「ハーツアンドハンズ アメリカ社会における女性とキルトの 影響」</u></p> <p>パット・フェレロ著 (日本ヴォーグ社/1990.9)</p> 	<p>MIWの交流サロンには今、パープルリボンキルトが展示されています。19 世紀のアメリカの女性たちは、キルトに日々の記録を縫い込み「アルバム」と呼んでいました。キルトはアメリカの独立記念旗や地図、丸太小屋の設計図にもなりました。女性たちが集まってキルトを仕上げる場—キルティング・ビーでは、奴隷解放、アルコール撲滅、女性解放運動が語られました。キルトは単なる手芸ではなく、女性たちがつながり、公正な社会に向かう場になっていったのです。80 以上ものキルトや当時の写真から、女性たちの手が生み出したキルトが社会を変えてきた歴史が見えてきます。</p>

<p>Day3</p>	<p><u>「聖なるズー」</u></p> <p>濱野ちひろ編著（集英社／2019.11）</p> 	<p>親しい関係において、抑圧やコントロール、上下関係という暴力を含まない構造とは何か？</p> <p>DV サバイバー(DV 被害から立ち上がった人)である著者による、今までになかった視点で性と新しいパートナーシップを考えるきっかけになるノンフィクションです。</p> <p>「ズー」とは動物性愛者のこと。</p> <p>テーマの奇抜な印象とはうらはらに、内容は真摯で実直です。</p> <p>京大の研究論文がもとになっていますが読みやすく、面白いのでオススメです。</p>
<p>Day4</p>	<p><u>「カラーパープル」</u></p> <p>アリス・ウォーカー著 柳沢由実子訳 （集英社／1986.4）</p> 	<p>これは、20 数年前に大学の卒論で書いた本でした。「本でした」と書いたとおり、忘れていました(笑)。今回、おすすめしたい 1 冊と言うことで、突然思い出し、読み返してみました。</p> <p>面白い！ストーリーは、主人公セリーが義父からの性暴力、夫からのDVというつらい日々の中で、愛する人々と自分自身の力で、この困難に立ち向かい、幸せをつかむというものです。ざっと一文で書いてしまいましたが、みなさんにもぜひ読んでみてほしい。なお、著者であるアリス・ウォーカーはこの本でピューリッツァー賞を受賞しています。</p>



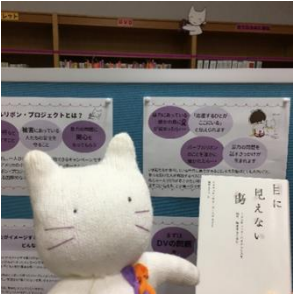
<p>Day5</p>	<p><u>「私をコントロールしないで！ あなたを支配するパートナーとの 縁の切り方」</u></p> <p>リチャード・J.ステナック博士著 白川貴子訳 (ヴォイス/2002.9)</p>	<p>あなたの自信やプライド、生活能力までも奪うパートナーのコントロール。自信のないあなたに、コントロール関係に落とし込められないためのヒントを与えてくれる一冊です。自分の過去の経験の振り返りから、コントロール関係から抜け出すための計画まで立てることのできるエクササイズも役立ちます。</p>
<p>Day6</p>	<p><u>『「支配しない男」になる 別姓結婚・育児・DV 被害者支援を通し て」</u></p> <p>沼崎一郎著 (ぶねうま舎/2019.5)</p>	<p>DV 被害者支援に関わり、夫婦別姓を実践し、フェミニズム運動に参加して「支配しない男」になろうと努力を続ける男性の視点で、性暴力と性差別の構造を描き出しています。「支配する男」が作り上げてきた文化や制度を、男性はどうすれば乗り越えられるのでしょうか？</p>
<p>Day7</p>	<p><u>「ジェンダーからソーシャルワークを 問う」</u></p> <p>横山登志子編著 (ハウレーカ/2020.5)</p>	<p>1990 年代、フェミニズムが日本も含め世界的な広がりをみせた時期、社会福祉分野では、女性は児童、家庭福祉の一部としてしか取りあげられていませんでした。</p> <p>本書に、「女性とは家庭に包摂された存在である、すなわち妻であり母であるという理解に留まっていることを示すものである」(須藤八千代氏)とあるように、現在の社会福祉士養成学校のテキストにおいても同様の扱いであることを知る人は少ないように思います。</p>



<p>Day8</p>	<p><u>「暴力を受けていい人はひとりもない CAP(子どもへの暴力防止)とデートDV 予防ワークショップで出会った子ども たちが教えてくれたこと」</u></p> <p>阿部真紀著 (高文研 / 2018.12)</p>	<p>様々な暴力から身を守るためには、「No と言う」「逃げる」「誰かに話して助けてもらう」、これら全て「していい」ことなのだ伝えることはもちろん、発されたSOSがどんなに小さくとも正しく受け止めること、そのどちらも重要なのだと改めて感じました。「自分で自分を大切にしている」それは子どもたちにとってだけでなく、今を生きる大人たちにとっても大切なメッセージだと思います。</p> 
<p>Day9</p>	<p><u>「恐竜の離婚 変わっていく家族のために (絵本シリーズ『パパとママが別れた ときに…』)」</u></p> <p>ローリーン・クラスニー・ブラウン文 マーク・ブラウン絵 日野智恵、日野健訳 (明石書店 / 2006.9)</p>	<p>子どもの面前でのDVは児童虐待であり、子どもに大きな影響を与えます。状況によっては離婚という場合もあるでしょう。子どもに、離婚をどう説明したらいいのか悩む親もいるかもしれません。この絵本では、恐竜のキャラクターが、なぜ親は離婚をするのか、子どもはどのような感情を持つのか、その気持ちはどうしたら軽くなるのか等、状況に応じて説明します。</p>  

<p>Day10</p>	<p><u>「三つ編み」</u> レティシア・コロバンニ著 齒藤可津子訳 (早川書房/2019.4)</p>	<p>インド、カナダ、イタリアのそれぞれの国の三人の女性たち。 何もかも違う中で、三人とも不運や試練に見舞われながらそれを克服するために奮闘し、自分の意思を貫くことが共通しています。 そして接点のないはずの三者がまさに三つ編みのように交錯します。 読み進めるうちに、それらの三人に自分まで思いを重ね、四人目の主人公になって一緒に闘っています。 フランスで100万部突破。文学賞8冠達成の話題の書。</p>
<p>Day11</p>	<p><u>「『ほとんどない』ことにされている側から見た社会の話を。」</u> 小川たまか著 (タバックス/2018.7)</p>	<p>性被害・性差別の被害に対し、問題に蓋をするかのように「ほとんどない」ことにしている今の社会。安全な場所から被害者の声をかき消そうとする社会の暴力に、無意識に自分も加わっていたかもしれないとハッとさせられました。被害者の視点を少しでも知ってほしいと願う著者の思いを、一人でも多くの方に伝えたいと思います。</p>
<p>Day12</p>	<p><u>「それはデートでもトキメキでもセックスでもない 『ないこと』にされてきた 『顔見知り』による強姦の実態」</u> ロビン・ワーショウ著 山本真麻訳 (イースト・プレス/2020.6)</p>	<p>知っている人だからといって、性的に合意のないセックスは犯罪です。 一人きりで耐えようとせず、助けを求めることの大切さ、また、声をあげることのできる社会づくり、知識を広げていくことの重要性を改めて感じました。</p>



<p>Day13</p>	<p>「DV 加害者プログラムマニュアル」</p> <p>リスペクトフル・リレーションシップ・プログラム研究会（RRP 研究会）編著 （金剛出版 / 2020.3）</p>	<p>この本をまず読むべきは加害者なのかもしれない。パートナーに暴力を使って来た人が、どのように暴力から離れていけるのかの挑戦の手引きです。暴力をふるってしまい、それを後悔したり、自分を責めたりしている加害者も少なくないはず。この本は、そのような日々からの出口があるというメッセージを送っています。また、同時に DV を受けている被害者、その支援者にも有益です。</p> <p>加害者を知ることは現実的な選択の糧となります。</p> <p>更に、いじめ、ハラスメントなどの対人暴力に関心を寄せる人々にとっても、暴力の「からくり」は共通であることを実感し、暴力についての見方を変える一冊になるでしょう。</p>
<p>Day14</p>	<p>「目に見えない傷 ドメスティック・バイオレンスを知り、解決するために」</p> <p>レイチェル・ルイズ・スナイダー著 庭田よう子訳（みすず書房 / 2020.6）</p> 	<p>アメリカで起こっているドメスティック・バイオレンス(DV)の事件取材し、その実態に迫ります。事件の前後で、被害者、加害者、関係家族や警察、支援者などがどのような行動をとったかが、詳細にわたって書かれていて、現実の姿がくっきりと見えてきます。周囲には見えにくい DV 当事者の考え方や支援者とのやり取りがわかり、DV 被害防止に本当に必要なことがわかります。</p> 